

日食回顧四十年

七 高 村 上 春 太 郎

1887年八月19日の日食を観察するため福島縣白河へ米國から出懸けて來た
トツド博士は、1896年八月9日の日食の時には前回よりも大規模の準備を整へ、
當日の約半年前に器械や道具の全部をヨツト「コロネツト」に載せ、南米の南
角ホーン岬を廻はりて、北見國枝幸に送り着け、一行は米國を横斷し、桑港
より「コロネツト」で着日した。此のヨツトは僅か152噸で、トツド氏の大學ア
ーマストの卒業生なる鑛山師ゼームス氏の所有であり、又た觀測隊派遣の全
費用も同氏の好意に依るのである。來航時には、器械は悉く櫓に縛り付け、ニ
ウヨク出帆後七週間で桑港に着いた。船室にゼームス夫婦を始め、トツド
夫人其他一行の人々十名を容れて來た(其外か舟夫15名)此れが爲め、船の重
心は高くなり、航海中船體の動搖劇しく、マハリヤネス(即ちマゼラン)が昔
しかの岬角を廻はつて太平洋へ出た時とは反對である。詳細はトツド夫人著
“コロナ・アンド・コロネツト”にも載せてある。

予は知人の紹介に依り此群に加はらんと欲し、七月中旬トツド夫人と京都
を出で、神戸より西京丸に乗じて横濱に向ふた。(陸路は水害のため汽車不通
である。又此西京丸は日清戰爭に使用された船で、彈痕が甲板上所々に残つて
居た。)横濱では前記コロネツト號内に起臥すること三日にして大連丸に移乗
した。船内には肝付海軍大佐が居られた。矢張り枝幸まで行かれるので、其
目的は、當時は日清戰爭後、露佛獨が三角同盟を作り吾國を威嚇せんと力ん
で居たので、殊に枝幸には佛艦アルゼーでランスチチウの天文家デランドル
博士を日食觀察のため送り來た儘、枝幸の沖合に碇泊して居たから、水路部長
の役目で調査に行くところである。船が小樽へ着くまでは、肝付大佐、トツド
夫人及び日本海事雜誌社幹事久松氏と四人の會話で少しも寂寞を感じ無かつ
た。途中で、荻濱附近を航した頃、三陸海嘯で遭難した人々の屍が波上に浮沈
するのを見た。小樽で貫徹丸に乗換へ、増毛に寄港したので、船は八月5日
に枝幸に安着した。予は、先づ、肝付大佐に隨行し、寺尾臺長の觀測所を見

舞ひ、次ひで臺長の紹介によりデランドル觀測所を見物した。前記の理由で枝幸村は佛人に便宜を與へない。之に反し、米人トツド氏に對しては非常なる好意を表し、小學校新築の爲め當時空屋となり居たる舊校舍全部を與へたため、觀測上のみならず、全員宿泊所としても使用が出来た。予も一行と共に此校舍内に起臥する身に成つた。

校内宿泊の總勢十六人のうち、巡查一人、賄方二人を除けば、他は多少觀測に關係ある人々で、日本人は、予の他に、札幌農學校助教授大島金太郎氏、東京寫眞師小川一眞氏及其助手二人、機械師竹村氏で、其他は米人である。四十三歳のトツド博士と其夫人を始めとし、グリセリン・ボンプ考案者トムソン氏及其長男がある。此人は一行の、最年長者で、マサチウセツト農學校技師が本職で、曾てはトツド氏と共に北光の研究に従事せしこともあつた。ゲリツシュ氏はビツケリングの助手で、其前は測候所長も勤めたこともある。今回は主任助手として隨行した。尚ほ米艦の一等運轉師たりしペムベルトン氏、コロネツト號の六分儀係ベルトルド氏(露國生れの米人)も有る。ゲリツシュは厭世家、ペムベルトンは常に澁顔を帶び、ベルトルドは粗暴であるのに、獨りトムソン父子は常に嬉々として、克く勤め、克く語り、予の心を最も強く引着けた。トツド氏が携帯の望遠鏡類は總數21箇で、7 $\frac{1}{4}$ 吋の對物子が最大で、6吋の鏡、4吋の對物子もある。尚ほ分光器、偏光器、寫眞器等で、此等は悉く同一の廣い板の上に平行に載せられ、トムソン氏考案のグリセリン・ボンプを介し、電流の力で徐々に太陽の運動を逐ふて動く仕掛である。昔しのことであるから、分光器なども舊式で、五個の大プリズマの環坐せるものである。皆既時二分四十秒間に640枚の寫眞を逐次に映つす意氣込であつた。尚ほ器械には二個のクロノメータと、口徑3吋の子午儀とがある。クロノメータは一秒二打であるのは無論であるが、半秒と一秒とが音が違ふて居るので、使用上甚だ便利に思はれた。子午儀はワシントン天文臺の借物である。其のレチクルは蜘蛛網を使用せず、セルロイドの如き透明薄片に六本の線を引いたものである。

トツド氏は、數年間に渡る皆既線路諸點の氣象報告を日本政府より貰ひ受け、吟味の上で、枝幸こそは最適地ならんと決定したのであつた。日食の日

即ち八月九日には、村長白阪氏は村民に布令して竈の烟を出すことを禁じた。其日は朝の間、快晴で、日食隊の人々は申すに及ばず、日食見る様を見んとて北海道の諸地より集どひ來れる數百の人々も皆な楽しんで待つて居た。イヨイヨ三時二十分が近づくと、天上には雲行急がしくなり、初缺の時既に淡雲が日面を遮ぎつたのである。其より氣溫は次第に沈降する。世の中は暗くなり、鳥や鶏が鳴き始める。予は出て見度くは思へど、トツド氏より頼まれた計算を既に大體は果はり誤算は無いかと吟味中であるから躊躇して居た。其時トツド夫人は突然後方に現はれ、予の肩をゆすり、早く出て器械の所へ行けと命じたので、眼をこすり乍ら出で行く……哀はれ、二分四十秒は樂しひ夢のごと、いとも速かに消へて逝く。雲越しに見へるコロナは薄布を被ふた婦人の顔の様に輝いて居る。……後で聞けば、トツド夫人は燈臺の上で、すげ無いコロナの振舞ひに對し洋海無窮の恨みを泣いたそうである。

寺尾臺長の觀測所は、テントを張り、ブラシヤ製の天體寫眞器を裝置し、主として外部コロナを寫映するのを目的として居られた、デランドル氏もテントを張り、分光器でコロナが太陽と同時に自轉するか否やを確かむるのが目的で有つた。實は此種の研究は既に同氏が數年前西班牙國セネガルの日食で確定し得たものであるが、今回は其を一層詳細に調べる積りで有つたらしい。

リック天文臺からは、シェーベリ氏が厚岸で觀測準備をして居たが、此は大雨に降られた。尚ほ其の方面には菊池、蘆野、平山諸博士並びに、クリスチ、タナカ兩氏も居た。皆な天候不良であつた。獨り利尻島の觀察者は快晴の空にコロナの實相に親炙することを得たが、何分器械も寫眞器も持つて居ないので、唯だ寫生したばかりである。此寫生こそは今回の日食の唯一のみやげと申すべきである。日食後は枝幸小學校新築祝賀會、觀測者慰勞會、村祭等があつて、村内は見物人と軍艦アルゼルの多數の水兵とが入り交じりて、甚だ賑かである。トツド氏夫妻は間もなくアルゼルに乗り横濱に向ひ、吾々は諸器械荷造りにて世話して、漸く二十一日午後一時寺尾臺長群とトツドの群とは枝幸村に訣れを告げ、先きの貫做丸に乗りて出帆し、其晩利尻島鬼脇に寄りて一休した。同行者は、東京天文臺の水原氏を除けば、皆な上陸して遊

んだ。二十三日には小樽に着き、二十四日器械と共に威海丸に移つる、小樽に着くまでは寺尾先生の面白い話に傾聴して無聊を感じない。先生は昔し巴里天文臺で二ヶ月間學習されたことが有るので、天文臺の昔話が澤山有つた。曾て海王星發見のルヴェリエが、中々横着で、一時に四十人の臺員を免職したとき、其内ちのレプシエと云ふ人が、廻はり廻はつて日本に來り、攻玉舎で數學を教へた。日本婦人を娶り、吾邦で落着いて居たが、コレ病大流行の節、惜しいことには微くなられたそうだ。此話も其の時に聞いたのである。寺尾臺長に隨行せる人には、水原氏の外に、大學生二名（名を逸す）と、松崎（？）助手とが居られたが、皆な快轄な人々で有つた。小樽で此等の觀測者と訣れて後ちは、予はアイマスト隊と青森を経て汽車で東京に向ふた。

（終）

寄贈交換された圖書雜誌

最近本會が寄贈交換した下記の書籍は大部分は更に花山天文臺へ寄贈し保管せられ、他は本會で整理保管して居ります。因みに之等の書籍は本會々員に限り、從來本部を訪ねて下さる方々の閱覽に供して居ります、尙今後も自由に御利用下さい。

Russian Astronomical Journal (露).

Engelhardt Observatory Bulletin (露, Kasan obs.).

Circular of the Astronomical Observation at Warsaw.

日本天文史料綜覽(神田茂氏).

Total Eclipse of the Sun, June 19. 1936, in USSR.

Working Ephemerides for the Determination of Time by the Method of
Corresponding Altitude (I—IV) (露, Moscow)

東京天文臺報・大阪帝大理學部研究報告(和, 歐文)・東北帝大天文學報(和, 歐文)・

水澤緯度觀測所報告(歐文)・新竹、臺中兩州烈震報告(中央氣象臺)・

海洋氣象臺報告・海洋氣象臺彙報・中央氣象臺歐文彙報・

農學研究(大原農業研究所)・

天文月報・科學・理學界・應用物理・京星・ウラニヤ・科學知識・

Milky Way.

氣象集誌・地學雜誌・地質學雜誌・地球・オリム・ラヂオの日本・